

靈山往詣と即身成仏——覚え書き

渡 辺 宝 陽

一

『開目抄』に示されるように、日蓮聖人によって成仏は唱題成仏・即身成仏・一念三千の成仏として示されていることは今更言うまでもない(定遺五九〇頁)。そしてまた一方では靈山往詣ということも示されており、これらの成仏の説示の關係については矛盾するものではないかとの論もなされている。そのように、成仏ということはどうとらえるかは、日蓮教学にとって重要な一課題であると言ってよいであろう。しかも、成仏という表現は同一であっても、日蓮教学展開史上、そのイメージは果してどのように理解されたのであろうか。われわれにとって、成仏のイメージを自己の信仰にどのように位置づけ、意味づけるのかによって、その信仰の世界は大きく変化するものであろう。

周知の通り、初期仏教における解脱への道は涅槃(Nirvāṇa)を目標として追求されて来た。木村泰賢博士によれば、印度における解脱は小我の大我への一如として集約できるとい^う。このような教理論が、上座部仏教の信徒に対してどのように指示されているか、よく知るところではないが、筆者は小乗仏教の信徒が、満月の夜にニルバーナに入^りて(ということとは釈尊のニルバーナの世界に一如して)再びこの世に生れて来たくないという信仰告白をしたのを、驚きをもって聞いたことがある。更に彼は、日本の仏教徒は凡人が安易に即身成仏することができることを

を非難して、（歴史上に出現せられた）釈尊以外に仏陀は存在するのかという疑問を提出したのであった。

ふりかえってみると、われわれは深遠な成仏の世界をどのようなイメージをもって把えようとしているのであろうか。そのような関心から日蓮聖人の示された成仏の説示をうかがってみよう。

二

いわば、日蓮聖人が成仏ということをかようなイメージとして示されているかを尋ねると、

一、靈山浄土への往詣

二、即身成仏

そして

三、仏凡一如の世界

として示されていると拝することができよう。

一の「靈山浄土へ参る」ということについては、既に望月敏厚博士が「日蓮聖人の靈山往詣」⁽³⁾で整理せられているところであるが、特に聖人晩年にこのことが強調せられている。たとえば、「千日尼御前御返事」（平賀本）には、「我等は穢土に候へども心は靈山に住べし。御面を見てはなにかせん。心こそ大切に候へ。いつか／＼釈迦仏のをはします靈山浄土にまひりあひ候はん」（定遺一五九九頁）と述べられ、「上野殿後家尼御前御書」（真蹟存）には、上野の後家尼に子息の成仏のすがたを語られて、「心は父君と一所に靈山浄土に参りて、手をとり頭を合せてこそ悦ばれ候らめ」（定遺一七九四頁）等と述べられている。すでに、聖人は「開目抄」において、「我法華經の信心をや

ぶらずして、靈山にまいりて返てみちびけかし」（定遺六〇五頁）と、たとえ現身を失っても釈尊のまします靈山からこの国土をお救いになり、お導き下さるうという境地を示されている。そのような法華経が常住に説法されつづける靈山会上への回帰が、成仏の証（あかし）として、千日尼や南条の尼や四条金吾等々に語られているといえよう。

A この点について、そのありさまをくわしく描写しているのは「千日尼御返事」である。

されば故阿仏房の聖靈は今いづくにかをはすらんと人は疑フとも、法華経の明鏡をもって其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候。（定遺一七六一頁）

ここでは、阿仏房の故靈が法華経常住説法の靈山会上に参入している姿の確認として、成仏が語られているということができよう。

B ところで、その「千日尼御返事」の前文には、

九界六道の一切衆生、各各心かわれり。……心のにざるゆへに面おもてもにず。まして二人十人、六道九界の衆生の心いかんがかわりて候らむ。されば花をあいし、月をあいし、すき（酸）をこのみ、にがきをこのみ、ちいさきをあいし、大なるをあいし、いろくくなり。善をこのみ、悪をこのみ、しなくくなり。かくのごとくいろくくに候へども、法華経に入りぬれば唯一人の身、一人の心なり。（定遺一七六〇頁）

とあるが、これによれば、前述のように、故靈各々のすがたが確認されるとしても、法華経の世界に帰一されたからには、同一身にひき入れられることが示されていると言えよう。このような例は、「上野殿母尼御前御返事」（真蹟存）にも次のように語られている。

乞願こぎわんは悲母我子を恋く思食し給たまはば、南無妙法蓮華経と唱なさせ給たまて、故南条殿・故五郎殿と一所に生なれんと願は

せ給へ。一つ種は一つ種、別の種は別の種。同妙法蓮華經の種を心にはらませ給なば、同妙法蓮華經の國へ生れさせ給べし。三人面をならべさせ給はん時、御悦いかがうれしくおほすべしや。(定遺一八一三頁)

すなわち、同じ妙法蓮華經の仏種によって引導されるならば、同じ妙法蓮華經の國へ生れるのだということが確かめられている。このことは更に、「如来則為以衣覆之、又為他方現在諸仏之所護念」(法師品)の經文を引用して、その經文の心は、十方の諸仏がぞくぞくと影現されて、「法華經の行者を守護させ給ふ事、譬ば大王の太子の諸の臣下の守護するが如」くであると言ひ、更に諸天の守護にまで語り及んでいるのであつて、法華經の國というイメージが見事に語り示されていると言えよう。

三

次に、二、即身成仏について一瞥を加えることとする。即身成仏ということとは、しばしば聖人遺文に示されている。たとえば、「妙法尼御前御返事」(真蹟存)には次のように述べられている。

法華經の名号を持つ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いわうや無始の善根變じて金色となり候なり。しかれば故聖靈、最後臨終に南無妙法蓮華經となへさせ給しかば、一生乃至無始の惡業變じて仏の種となり給。煩惱即菩提、生死即涅槃、即身成仏と申法門なり。(定遺一五三七頁)

ここで極めて譬喩的に語られる煩惱即菩提、生死即涅槃、即身成仏の法門は、「始聞仏乘義」(真蹟存)に比較的くわしく述べられるところであり、聖人が天台の『法華文句』によって就類種の開會、相待種の開會を論じておられるところである。このことについては別に論じたところであるが、前者の就類種は法華經に帰納するところであると

は言え、一分、爾前の経々にも通ずるところであるとされる（定遺一四五二頁）。それに対して、相待種の開会こそ法華経が開示しようとする法門であるという。

止観云、云何聞円法聞ニ生死即法身・煩惱即般若・結業即解脱。雖レ有三名ニ而無ニ三體。雖ニ是一體ニ而立ニ三、名。是三即一相 其実無レ有レ異。法身究竟般若解脱亦究竟。般若清淨 余亦清淨。解脱自在 余亦自在。聞ニ一切、法、亦如レ是。皆具ニ仏法、無レ所ニ減少。是名聞円ニ等云云。此釈即相對種、手本也。

其意如何。

答、生死者我等苦果依身也。所謂五陰・十二入・十八界。煩惱者見思・塵沙・無明、二惑也。結業者五逆・十惡・四重等也。法身者法身如来 般若者報身如来 解脱者応身如来。我等自ニ無始曠劫已来具ニ足此三道。今値ニ法華経ニ三道即三徳也。（定遺一四五三頁）

しかし、善因によって善報を生ずるのは仏教の常識であるが、われら凡夫は、その根本を尋ねるならば父母の精血赤白二滯和合して一身となったのであるから、むしろ悪の根本であり不浄の源である。その不浄は、たとえ大海を傾けて洗っても洗淨とはならず、苦果を得ている凡夫の依身は、その根本を探り見るならば、貪瞋癡の三毒より出たものである。この煩惱と苦果との二道によって業を構えているのであり、この業道が即ち煩惱を結縛している法なのである。だから、このような煩惱・業・苦の三道を転じて三仏因と称することができようかという疑問が起きて来ることは当然のことである。このような疑問について『始聞仏乘義』は、『大智度論』の「変レ毒為レ薬」の説によって理解し、次のように象徴的に論断している。

但付法蔵第十三天台大師高祖竜樹菩薩釈ニ妙法之妙、一字、譬如ニ大薬師能以レ毒為レ薬等云云。云レ毒者何物法身・般若

・解脱也。能以毒為藥者何物。變三道為三德耳。天台云、妙名不可思議等云云。又云、夫一心乃至不可思議境意在於此二等云云。即身成仏申此是也。(定遺一四五三頁)

つまり、天台大師が『法華玄義』に「妙名不可思議」と述べ、更に『摩訶止観』第五卷に一念三千の法門を明らかにしたことは、すべてこの変毒為薬の論理が根本にあるのであって、それがとりもなおさず即身成仏ということであるといのである。このことからすれば、『観心本尊抄』には即身成仏という用語が格別用いられているわけではないが、観心段も本尊段も弘通段も、その基本にこのような即身成仏の問題が問題とされているということが推察できるところではあるまいか。故安藤俊雄教授は、相対種の論を「敵対的相即の論理」として高く評価しているところであるが、日蓮聖人は更に変毒為薬の教えを凡夫に具現するといふところに即身成仏の義を強調され、凡身のままに成仏を確信する本門法華経の教えを確立されたのである。

即身成仏ということは、今の論以上にイメージをもって語ることは困難であろうが、「光日尼御返事」には、

三のつなは今生に切ぬ。五のさわりはすで(既)にはれぬらむ。

と、一念三千の珠を内包する法華経によって女人の障碍たる三障・五従を超越し、

心の月くもりなく、身のあかきへはてぬ。即身の仏なり。たうとしく。(定遺一七九五頁)

という境地に到達することを保証されているのである。

「一念三千の成仏」という表現は『開目抄』において、宝塔品の「三箇の勅宣」につづいて提婆品の「二箇の諫曉」を明らかにする段に述べられるところである。

提婆達多は一闍提なり、天王如来と記せらる……一切五逆・謗法・闍提、天王如来にあらはれ了。毒薬変じて甘

呂(リ)となる。衆味にすぐれたり。

竜女が成仏此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらはす。法華已前の諸小乘經には女人成仏をゆるさず。諸の大乗經には成仏往生をゆるすやうなれども、或改転(カ)の成仏(ニ)、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申して竜女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあげたるなるべし。(定遺五八九—五九〇頁) ここにおいても涅槃經に出拠するという変毒為藥が、提婆達多・竜女に象徴される悪人・女人の成仏の根本にあることが示されている。ここで、「改転の成仏」というのは、『録内啓蒙』には「爾前ハ悪人女人ノ成仏ヲ明セトモ、改悔発心ノ上、転悪帰正シテ後ノ成仏ニシテ、法華ノ如キノ当位即妙ノ成仏ニアラサルカ故ニ改転ト云義ナリ、或ハ展転ノ授記トモ名ク」と解釈している。更に『啓蒙』は「一念三千の成仏」について、東陽房忠尋が『弘決』の「当知身土一念三千故成道時」の文を引いて「法華十界一念成仏、十界一念授記也」等と述べるところに相当するところありと言ひ、また「古抄」に「今經皆記皆字事、十界当位即妙開會言レ之事如上、猶有深義、意以三十界開會成レ之也」等とあるのを引き、「今云、此義ハ今ノ御書一念三千ノ成仏深義ニ相当レリ」と述べている。ここにいう十界同時の成仏、当位即妙本有不改の成仏について、『本化聖典大辞林』は次のように要約して述べている。

一念三千の成仏とは、森羅三千の諸法は、悉く十界衆生の各一念に具す。されば一人成仏すればその所具の十界三千の諸法もまた同時に成仏す。之を法界一念の成仏とも、十界同時同共の成仏とも、法界の成仏ともいう。されば教主積尊の成仏は、やがてまた九界衆生の成仏なり。積尊の本覚開顯は、やがてまた九界衆生の本覚の開顯なり。積尊所具の九界なる故に。「一身一念遍於法界」とは是也。されば本覚の積尊よりすれば、九界はこれ本覚の仏界所具の九界なり。本門の九界よりすれば、教主積尊の本覚開顯は、これ衆生界所具の仏界を顯わしたも

うなり。仏は衆生の仏にして、衆生は仏の衆生なり、ただ是れ同共同体の一念三千、一人の成仏は即ち十界同時の成仏なり。これを一念三千の成仏という。(上巻二七一頁)

周知の通り、「当知身土一念三千故成道時」という『弘決』の文は『観心本尊抄』の観心段を結び、本尊段に転換する重要な文章であるが、以上のように、当位即妙・十界同時成仏ということが一念三千の成仏の重要な要素であつて、したがつて日蓮聖人の示される即身成仏もこのようなイメージに基くものであつたと推察されるのである。⁽¹¹⁾

四

さて、従来、靈山往詣と即身成仏との関連について、あるいは矛盾するものだとし、あるいは二つの思想的流れを折衷したものだとの批判がないわけではない。⁽¹²⁾しかし、如上に見たようにそれら兩つの表現の基本に、一念三千の成仏ということがあることを知ることができる。一念三千の成仏については別稿を期したいところであり、十界同時の成仏、法界成仏についての論を深めることが必要であるが、『開目抄』に

九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備わりて、眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし。(定遺 五五二頁)

と示されるのに即して、仏界即九界の成仏と言うこともできよう。いわばこのような仏凡一如の世界、自他合一の世界が本仏である久遠実成の教主釈尊の救済によって具現することを確認されているのが、日蓮聖人の宗教の根本であろう。

即身成仏という表現は、われわれ凡身に即しての表現であるが、これをしばしば、法華經の世界として描かれてい

るのではなからうか。『法華取要抄』には、

此土我等衆生五百塵点劫已來、教主積尊愛子也。依不孝失于今雖不覺知不似他方衆生。有緣仏与結縁衆生譬如天月浮清水。無緣仏与衆生譬如下雷聲盲者向日月也。(定遺八二二頁)

今來至法華經授与実法。法華經本門來至略開近顯遠自華嚴大菩薩・二乘・大梵天・帝釈・日・月・四天・竜王等位隣三妙覺又入三妙覺位也。若爾者今我等向天見之。生身妙覺仏居三本位利益衆生是也。(定遺八四頁)

とある。ここに示される有縁の仏と結縁の衆生、すなわち久遠積尊と末代凡夫との関係は、天の月と清水に浮んだ月影との関係に譬えられる。言わば、このような教主積尊の救済の世界を、日蓮聖人が前掲の『開目抄』において、無始の仏界と無始の九界の相即相入という救済の確証として述べられたものであろうし、それはとりもなおさず、われわれにとって、即身成仏の確証として理解することができるのである。そして、聖人は同じ内容を、「種と菓との同時の成仏」(『開目抄』定遺五九九頁)等の例に見られるように、さまざまな表現で語り示されていることを知るのである。

五

この小稿では、日蓮聖人が以上のような三つの角度から成仏のイメージを示されていることを確認するとどめるが、くりかえし、一の靈山往詣も、二の即身成仏も、三の仏界即九界(仏凡一如)の世界への悟入を語り示されたものであることを確めておきたい。つまり、一の靈山往詣は法華經常住説法の会座への帰入ということに即して示され

たのであり、二の即身成仏は法華經の救済に光被される凡身に即して示されたものと規定することができよう。そして一・二は決して矛盾する表現ではない。例えば聖人は上野尼（南条尼）に対して、前述のように、「心は父君と一所に靈山淨土に参りて、手を取り頭を合せてこそ悦ばれ候らめ」（定遺一七九四頁）等と靈山往詣を語りかけながら、他方では同じ上野殿に

法華經のゆへにてだにもあるならば、即身に仏にもならせ給なん。（「上野殿御返事」日興写本、定遺一八六一頁）

と述べられているのである。

そして更に言うならば、地獄と仏の所在をどこに見るかについて、「重須殿女房御返事」には、結局それはわれら凡扶の五尺の身の内にあるのだと語られている（小定遺一八五六頁）。地獄の恐ろしさを状景として語ることも真実であり、同時に、それが五尺の身の上にあることもまた真実なのである。

成仏の説示もまた同様に類推することができるのではなからうか。

〔註〕

- (1) 戸頃重基「娑婆即寂光と靈山往詣論」（『法華四四卷、一・二・三号』）
- (2) 木村泰賢『大乘仏教概論』第二篇第二章「解脱論」
- (3) 『日蓮教学の研究』本論第七章
- (4) 拙稿「日蓮聖人の仏性論の基盤」『印度学仏教学研究』二八卷二号
- (5) 安藤俊雄『天台性具思想論』四五頁以下、一二九頁以下等。
- (6) 同様の表現が「妙一女御返事」（三三寺本、定遺一七九九頁）にあり、同時に「就類種・相對種の成仏」という表現もある。
- (7) 日全本、第二——九五七頁

- (8) 日全本、第二——九五八頁
 (9) 日全本、第二——九六〇頁
 (10) 日全本、第二——九六一頁
 (11) 「当位即妙」という表現は、「上野尼御前御返事」(真蹟存、定遺一八九二頁)、「妙一女御返事」(三宝寺本、定遺一七九八頁)等に見られる。
 (12) 前註(1)参照

(追記) 長年、身延山久遠寺と身延山短期大学のために御尽力された林是幹先生の古稀記念に拙稿を採録していただきたく光榮に浴しましたことを感謝致します。なお、重要な課題を極く一側面からのみ論じたに過ぎないことをお詫び致します。

(文部省科学研究助成費、昭和五十四年度総合研究Aによる研究成果の一部)